

入選

小さな親切

大分県 国見中学校

二年 古森 彩夏

私は、衝撃を受けました。去年、友だちの家に遊びに行き、二人でけん玉をして遊んでいたとき、私はふと思いました。

「何年後かは、けん玉も社会の教科書とかに載ったりするのかな。」と言うと、友だちは、「それまで地球は持たないよ。」と言っていました。

私が、(どういうこと?)と置いていたら、友だちがあるテレビ番組を見せてくれました。

そこには、変わり果てた2050年の東京が映っていました。人々は、空腹で住む家もないほどです。それを見た私は、とても恐怖感を感じました。

あと30年後に、日本はこんな風になる。私たちが40代の頃に、苦しむことになる。なにか解決する方法は、ないのか。そう思いました。

テレビの続きを見ると、解決する方法は、2030年までに「地球温暖化」「食品ロス」「プラスチックごみ」の3つを、どうにかしてなくさなければいけないのです。あと10年、私たちにはなにができるだろう。そこで思いついたのが、「海岸清掃」です。

幼なじみ3人を誘って、近場の海の海岸清掃をしました。分別も考えて、「燃えるごみ」「燃えないごみ」「びん、空き缶」「ペットボトル」と役割分担をして、拾い始めました。拾い始めて大変だったことは、中身が入っているペットボトルです。そのまま分別して捨てるわけにはいかないので、誰かが開けて、中身を捨てなければいけません。

私たち4人の中では、「見つけた人が処理をする」と決まりましたが、開けるにはやはり、勇気がいられます。だって、なにが入っているかわからない、未知の液体ですから。ちょっとでもよそ見をして開けたら、あら大変。軍手に、未知の液体がついてしまいます。

そう思うと、あまりポイ捨てなどはしないでほしいなと思いました。ほかのところでは、発泡スチロールのごみがとても多いところがありました。

昔は、4人で海に行くと、いかだ作りが始まるので、発泡スチロールやペットボトルなど、浮く物を集めていたのですが、今思うと、海洋ごみを使ったいかだで海に出て、発泡スチロールやペットボトルが取れたら、私たちもある意味では、ポイ捨てをした人の一員になってしまうのかなと思いました。

なかなか疲れる海岸清掃でしたが、終わったあとの海を見ると、たくさんあったごみが少しなくなっていました。

たった少しでもいい。それであの未来が防げるなら、疲れたってなんてことない。それに、一人ではあまり多くのごみを拾えない。だから海岸清掃をいっしょにしてくれている幼なじみ3人にも、感謝の気持ちでいっぱいです。

今でも私たちは、ときどき休日に海岸清掃をしています。2030年に向かって、これからも4人いっしょに活動をしていきます。

これが私たちの「小さな親切」だと思っています。